

原始仏教の理想と経営倫理

土屋 好重

一、正覚に立脚した寂靜の理念

寂靜 (santi) とか平靜 (sama) とかの境地を楽しむことが原始仏教の理想であつた。けれども釈迦牟尼の最初期の思想を示したものと云われる彼岸道品 (Paṇḍita) についての寂靜概念と、義品 (Attaka) 以後の經典中に現われた寂靜概念との間には、大きな相違が見られる。前者では独覺的な禁欲的な寂靜思想を説くが、後者では正覺的な穏和なそれを提唱するからである。ここではアツタカ以後に展開された寂靜觀をシヤカ・ムニの理想または理念であるとして研究を進めることにしたい。

人間の意識は一般に知・情・意に分けて研究せられるが、シヤカ・ムニが最も重んじたのは情すなわち感情の立場であり、寂靜や平靜の境地である。シヤカの最も初期における寂靜思想の中では、知の側面を重んじて意の側面を軽ろんずる傾向が強かつた。しかしながら彼の中期以後における思想では、知の面よりも意の面の方が重んぜられるものに移行せられた。そして先づ寂靜の理念を基礎とし、次いで寂靜さを推進せしめるための義利 (attā) の活動が重要視されたのである。ここにアツタとは中村元先生に從がつて「正しきか利が生ずる」活動（注1）であると解釈することにした。

二、寂靜の境地を推進する慈悲と布施

寂靜の境地は自らが閑静な場所に住むことなどによつても味わうことができるであらう。しかしそれとともに、他者が持つ感情の平安さに対しても、自分自身でそれに寂靜感を当然に感ずることができであらう。他の人や他の生物が懷く平安さや満足感に關して、寂靜味が十分に味わえるためには、積局的に義利行すなわち義行や利行がなされることが必要である。それが原始仏教において慈心とか布施 (dāna) とかが倫理として展開せられる理由である。慈悲經に「寂靜なる境を完全に了解して、善利に巧なる人のなすべきことは、堪能なる・正直なる・語りて好く感ぜしめ、柔和にして・高慢ならざる、ことなり」(注2) とある。

慈心や慈悲は金品なしにも行なえるが、布施は金品なしには実行できないものと一般に考えられている。今日問題にしたいのは經濟や經營のことである。そこで狹義の布施、換言すれば財施 (amisa-dāna) が課題にされるのである。シヤカの義利の精神にバツクアブされた寂靜の理想においては、自らが進んで喜んで乳糜(にゆうび)の布施をも受けるものとなるのである。まして僧伽としてならば世間に氣がねせず物施が受けられるのである。ここにおいてサンガの園 (saṅgharāṇas) には、門・接待堂・大舍・經行堂・浴場・蓮池などまでもが完備せられるに至つた。

三、適切に行じて財を得る経営倫理

慈悲は財が無くても我る程度まで実践することが可能であるが、布施や施与は財が無ければ、如何にそれを行ないたくとも、何をもなすことができないのである。布施を行ないしかも布施を系統的に実施するためには、その前提として財を獲得するということが必要である。換言すれば布施をするためには、先づ集財をしなければな

らない。また布施が寂靜感を味わうための行為であるものであるならば、集財も同様に、寂靜感の推進をなすための間接的な義利行であるものと理解せられる。

仏陀やサンガは古代インドにおいては商売に従事しないものであるとされてきた。けれどもシヤカの新しい理想に従がつて、立派な精舎を作り相応の衣食を確保するためには、何等かの集財活動が要請されることになる。それは結局において、従来からの托鉢だけでは不十分とされ、積局的な各種の法供養の実行となつて現わされている。たとえば精舎において年中行事の法事を催すことにしたり、信徒の招宴に招かれて行つたりする方法などが具体的に挙げられる。

在家の信徒は、その家の扶養家族に布施をなしているものである。そしてサンガの園における寂靜生活を推進し促進するためにも、自分の布施をなすものである。信徒は、扶養家族やサンガの人たちの喜ぶ顔を見るために、相当の集財を試みる必要があるとされる。蓄財に関してアリラヴァカが「如何にして財を得るや」と質問した。これに対しシヤカは次の如く答えた。「適当に行じ (patin-pakani)、荷負に耐え、奮闘する者が、財を得る。」(注3)

patitupa とは「適当な」「ふさわしい」ことである。具体的には、顧客の立場に立つて顧客が真に満足するように、適切に対処して行動することであると言えるのである。

四、四摂法における利行の再認識
商家などの信徒が守るべき教えとして、シヤカによつて「シンガラの教え」が伝えられている。その中で友人や朋輩に対する教訓が次のように述べられている。「実に良家の子は次の五つのしかた

で……奉仕する。(1)施与と、(2)親しみあるやさしい言葉と、(3)人のためにつくすことと、(4)協同することと、(5)欺かないことによつてである。」(注4) この五項目が後に四項目に改められて、広く四摂法(布施・愛語・利行・同事)として普及されていることは周知の通りである。ここに利行 (athaccariya) とは義利行のことであり「人のためにつくすこと」である。そしてそれは「適切に行じて財を得ること」であると思われるのである。

本当に相手方のためになることをするのでないし儲けは与えられない。真に顧客に満足を与えるような商売をするとき、顧客の方でも利益を与えざるを得ないのである。最大の奉仕によつて適正な利潤を与えてもらうことが、原始仏教伝来の経営倫理であるものと考えることが出来る。ちなみに我が国においても道元によつて利行の問題が菩提薩埵四摂法の中で取り上げられている。その意義は次の文章を通じて明確に把握せられるであろう。「愚かなるものたちは、他人の利益を先にすれば自分の利益は損なわれるだろうと考える。そうではないのである。利行は、誰に対しても利行なのであつて、それは自分をも他人をも利することなのである。」(注5)

註

- 1、中村元編 原始仏典 筑摩書房 昭和四九年 九一ページ
- 2、南伝大蔵経 小部經典「一」 一四ページ
- 3、南伝大蔵経 小部經典「二」 六八ページ
- 4、中村元編 原始仏典 九〇ページ
- 5、禅文化学院(名古屋) 現代訳・正法眼蔵 一五六ページ